The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	家持の難波 : 風土表現の特質について
Author(s)	清原, 和義
Citation	語文. 1986, 47, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68742
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

家持の難波

――風土表現の特質について――

清原和義

(一)

約四半世紀に亙る家持の作歌活動の跡は、時も所も克明に辿ることができる。その軌跡の中には、さまざまな歌語の消長を見るが、本稿では、とりわけ風土表現に関わることばの消長あるいは偏向の中に家持歌の特質を探ろうとするものである。

万葉集に於ける家持名の初出は、家持十二才と推定される天平二年夏六月、筑紫夷守の駅家に於てである（巻四・五六七左）が、歌人としての家持が都を離れ接し得た風土としては、年代順に、天平十二年冬、聖武天皇行幸従駕の折の伊勢・美濃、同年冬十二月以降の山背恭仁京、天平十八年秋七月以降の越中及び越路、天平勝宝六年以降の難波、天平宝字二年秋以降の因幡があげられる。行幸従駕時の作は五首、因幡での作はわずかに一首に過ぎないので除くとしても、恭仁京での作や難波での作として明らかなものそれぞれ約三十首にくらべて、越中での作は約二百二十首を数え、恭仁や難波とは異なり都を遠く離れた異風土であること、満五年という滞在期間の長さなどが相俟って、一般には家持といえば越中守時代が云々され、越中の風土の研究もまた盛んである。

一方、兵部少輔家持のうたう難波の歌は、概して「古歌の成句を綴り合はせた感が強い」（『注釈』）、「情熱に乏しい」（『全注釈』）、「凡俗化してゐる」（『私注』）などの評の下に、防人歌との関わりを除いては、格別に顧みられることもない。まして、兵部少輔家持のうたう難波の風土については、取り立てて論じられることはなかったが、本稿に於ては、歌の首尾の如何に関わらず、兵部少輔家持のうたう難波を通して、その風土表現の特質をとらえようとするものである。歌人として恭仁や越中の異風土の生活を経験した家持が、三度目の異郷難波をいかにとらえたかを探りたい。

(二)

『続紀』によれば、天平勝宝六年四月「従五位上大伴宿祢家持為兵部少輔」、天平宝字元年六月「従五位上大伴宿祢家持為大輔」とあり、巻二十の題詞に拠っても「天平勝宝七歳乙未二月相替遣筑紫諸国防人等歌」、「（天平勝宝八歳）三月七日於河内国伎人郷馬国人之家宴歌三首」のそれぞれの歌群に家持の歌を見るので、家持が兵部

少輔として防人逓送の仕務に携わり、天平勝宝七歳及び八歳の春に少なくとも二度は難波に滞在していたことが明らかである。

その間、九度に亙り家持は長短歌二十六首をうたっているが、難波の地の地名表現（合計十六回）に限った場合、一つの偏向が顕著である。それは難波（難波の国・難波の海を含む）四回、難波宮・難波の三津・難波津各一回のように、難波という総名でこの地をうたう表現を除くと、堀江を六回集中してうたい、他に住吉二回、龍田山一回をうたう点にある。住吉については、「住吉の我が皇神」（四四〇八）は一面では神名であり、「住吉の浜松が根」（四四五七）は宴席に於てうたわれた地名であるが、詠出頻度のもっとも高い「堀江」は、すべて独詠歌の中にうたわれている。

その独詠歌の中でも、天平勝宝八歳三月にうたわれた、

① 堀江漕ぐ伊豆手の舟の梶つくめ音しば立ちぬ水脈速みかも
……（四四六〇）

② 堀江より水脈泝る梶の音の間なくそ奈良は恋しかりける
……（四四六一）

③ 舟競ふ堀江の川の水際に来居つつ鳴くは都鳥かも
……（四四六二）

右の三首一群は、すべての歌に堀江の地名表出を見るばかりでなく、左注に於てまでも「江の辺にして作る」と堀江が指示されている。総じて、巻二十の左注に於ては、詠歌の主や時や目的を示すことはあっても、詠歌の処所を示すことは無い。その異例の中に「堀江」が示されているのである。

同じく堀江の地名表出を見る天平勝宝七歳二月十七日作の三首一群の独詠歌は、

独り龍田山の桜花を惜しむ歌一首

④ 龍田山見つつ越え来し桜花散りか過ぎなむ我が帰るとに
……（四三九五）

独り江水に浮かび漂ふこつみを見貝玉の寄らぬを怨恨みて作る歌一首

⑤ 堀江より朝潮満ちに寄るこつみ貝にありせばつとにせましを
……（四三九六）

館の門に在りて江南の美しき女を見て作る歌一首

⑥ 見渡せば向つ峰の上の花にほひ照りて立てるは愛しき誰が妻
……（四三九七）

右の三首、二月七日に兵部少輔大伴家持作る

であるが、この一群の題詞もまた異例である。概して、巻二十の題詞は、防人関係の歌であることを示したり、宴席の場を示したり、たとえ独詠歌であっても「病に臥して無常を悲しび道を修めむと欲ひて作る歌」という程度のものであるが、この一群の題詞は単に所在を示すのでもなく、単に素材を示すのでもなく、所在と素材とそれに対する家持の感情までも示している。堀江で龍田を思い、堀江のこつみに嘆き、堀江の辺に美女を思うという、いわば語り過ぎの題詞の中心が堀江である。

このように使用頻度の高さ、題詞や左注に見る異例の表示などを併せると、家持の難波をとらえる拠り所としては「堀江」が最適と思われる。

（三）

家持がはじめて堀江をうたったのは、天平勝宝七歳二月九日の

⑦　防人の堀江漕ぎ出る伊豆手船梶取る間なく恋は繁けむ

……（四三三六）

という防人の心を思う歌に於てである。次いで同年二月十三日、いわば難波宮讃歌とでもいえる「陳私拙懐一首」の長歌に於て、

⑧　……敷きませる難波の宮は聞こしめす四方の国より奉る御調の舟は堀江より水脈引きしつつ……（四三六〇）

とうたい、(二)に挙げた堀江を詠んだ四首（①～③及び⑤）が同年二月及び翌年三月にうたわれている。すべて兵部少輔として防人に関わる公務により難波に滞在中の詠歌であるが、家持と風土「堀江」との観念的な最初の出合は、家持越中守時代にまでさかのぼる。

天平二十年春、橘諸兄の使者である田辺福麻呂を越中守家持はもてなし、しばしば宴会を開いたり、布勢の水海での遊覧をしたりしているが、その春三月の下旬、田辺福麻呂は宴席に於て、元正上皇難波行幸時の歌七首を家持たちに披露した。その中四首には堀江がうたわれ、

⑨　堀江には玉敷かましを大君をみ舟漕がむとかねて知りせば

……（四〇五六）

⑩　玉敷かず君が悔いて言ふ堀江には玉敷き満ちて継ぎて通はむ

……（四〇五七）

右の二首の件の歌は、御船江を泝り遊宴する日に左大臣の奏する、併せて御製なり。

⑪　堀江より水脈引きしつつみ舟さす賤男の伴は川の瀬申せ

……（四〇六一）

⑫　夏の夜は道たづたづし舟に乗り川の瀬ごとに棹さし上れ

……（四〇六二）

右の件の歌は、御船綱手を以て江を泝り遊宴せし日に作る。伝誦する人は田辺史福麻呂これなり。

⑫を除く三首には直接「堀江」の地名表現を見る。さらに、二か所の左注には「御船江を泝り遊宴する日」「御船綱手を以て江を泝り遊宴せし日」と難波堀江に於ける遊宴であることをくり返し記し留めている。(二)の⑤⑥の題詞や③の左注に於ける異例の「江」の表記と通じる意識が、この左注に既に表われており、おそらくは越中国庁付近から見おろす射水川の様子と難波堀江のそれとの類似から、左大臣の使者である福麻呂はこの一連の歌を伝誦したのであろうが、家持はその堀江に特に興味を抱いたようである。

それは、天平勝宝二年三月二日、ほぼ前年に福麻呂から伝え聞いた同時期・同場所での作、

遥かに江を泝る船人の唱を聞く歌一首

⑬　朝床に聞けば遥けし射水川朝漕ぎしつつ唱ふ舟人

……（四一五〇）

の題詞に「江を泝る」と表現し、また天平勝宝八歳三月七日の歌②に於ても「堀江より水脈泝る梶の音の」と、やはり福麻呂の伝誦した同じ時期、所も難波の堀江に於て「堀江を泝る」舟の様子をうたっている点から推しても明らかである。万葉集中、舟が「(川を)泝る」という表現をするのは、以上示した左注二か所と題詞と歌中に於ける四例のみであり、それがすべて家持の表現である所に、強い関心が思われる。家持は福麻呂の伝える難波を歌人として初めて認識し、射水川の景と重なる堀江や江を泝る舟の景に特に興味を抱き、難波の地に行けば堀江をうたうという予備的な構えを持ちつつ、難

波と対したのであろう。丁度、越中守着任当初、兼て用意の磯に寄せる白波の景をしきりにくり返しうたったように。[注(1)]

（四）

堀江に限らず、広く難波の景をとらえる時、家持の難波の風土に対する構えが一層鮮明なものとなる。

一般には難波といえば、もちろん難波潟がうたわれる。難波の地の地名では、総名としての難波（難波の国や難波の海を含む）六回の表出を除くと、難波潟八回・難波津五回が難波の地を代表する感があり、他に難波の菅二回、難波の崎・難波辺・難波道が各一回であるから、難波といえば難波潟・難波津と表現されるといっても過言ではない。中でも難波潟は、[注(2)]

難波潟潮干なありそね沈みにし妹が姿を見まく苦しも
……（二二九）

難波潟潮干のなごり飽くまでに人の見む児を我しともしも
……（五三三）

難波潟潮干のなごりよく見てむ家なる妹が待ち問はむため
……（九七六）

難波潟潮干に立ちて見渡せば淡路の島に鶴渡る見ゆ
……（一一六〇）

難波潟潮干に出でて玉藻刈る海人娘子ども汝が名告らさね
……（一七二六）

の五例が示すように、それが挽歌・相聞・雑歌のすべてにわたって、難波潟といえば潮干の景がうたわれている。潮干の難波潟が好景であるからこそくり返されたのであろうが、家持には、一首もこの難波潟をうたった歌がない。難波に長期滞在し、独詠歌をものこしている家持が、一般のもっとも好んでうたう難波潟をうたわないという点にも、家持の風土に対する積極的な意志を見るべきであろう。

人麻呂は石見の海の潟なき様をうたい、旅人は香椎潟を、赤人は明石潟の潮干の道を、虫麻呂は三宅潟をうたうなど、潟は多くの歌人の口をつく風土である。さらに金村には所も同じ難波潟をうたって「難波潟三津の崎より」（一四五三）の表現があり、家持の布勢水海の賦に和した、家持の歌友である池主の歌に「朝なぎに潟にあさりし」（三九九三）の句が見られ、家持の選択した防人歌にまで「よそにのみ見てや渡らも難波潟雲居に見ゆる島ならなくに」（四三三五）とうたわれているので、一般的な潟の描写も難波潟も、当然家持の意識下にあったはずである。その難波潟を家持は一切口にしていない。

潮干についても同じことがいえる。難波潟をうたわない家持は、越中の海に於ても、難波の海に於ても潮干の景をうたうことはない。たとえば、天平二十年春三月、越中を訪れた田辺福麻呂が家持の館より望見できる奈呉の海を眺めて、

奈呉の海に潮のはや干ばあさりしに出でむと鶴は今そ鳴くなる
……（四〇三四）

とうたったにもかかわらず、家持は「夕なぎに満ち来る潮の」（三九八五）、「沖辺より満ち来る潮の」（四〇四五）、「朝夕に満ち来る潮の」（四二一一）と潮満ちの景はうたっても、越中の海の潮干をうたうことはなかった。

それゆえ、難波潟をうたうのを忌避するのは、その潮干の景が家持の興を引く対象ではなかったということであり、それは、江を渡

るのでもなく、江を下るのでもない、江を泝る舟の景に特に興味を抱く心の対極に位置するものであったといえよう。いずれも、家持の風土に対する積極的な働きかけの結果である。

それでもなお難波潟や泝るの結果には、偶然という要素が考えられる。そこで、風土という大枠を取り除いて、「難波潟潮干」よりもさらに一般に多用することば、あるいは「泝る」のように家持に限られた語ではなく一般も家持もともに多用することばによって、家持の風土意識を確認したい。

まず、前者については、一般に約五十回という使用頻度の高い語である「草枕」をとりあげる。この語は家持の選択意志の強く働いている防人歌にも「草枕旅は行くとも」(四三二五)、「草枕旅は苦しと」(四四〇六)などと四例の使用を見、越中に居る家持に贈った大伴坂上郎女の歌にも「草枕旅行く君を」(三九二七)などと、また同様に平群女郎の歌にも「草枕旅去にし君が」(三九三七)などと使われている。さらには、越前掾大伴池主が家持に戯れに贈った歌にも「草枕旅の翁と」(四一二八)と表現しているので、いうならば家持圏に於てもしばしば使われる語といえよう。ところが家持にはこの「草枕旅」が約四百八十首の歌の中で一度も使われていない。注(3)

また旅中にある歌人たちが好んでうたう「海人娘子」についても同じことがいえる。所も難波に於て福麻呂が「海人娘子らが乗れる舟見ゆ」(一〇六三)とうたい、金村が「海人娘子棚無し小舟漕ぎ出らし」(九三〇)と難波の海人娘子をともにうたい、難波に限らず海人娘子は旅する都人の海辺への心ひかれを示すことばの代表として、万葉集中二十例の用例を見ることばである。ところが家持は「海人娘子」も一切うたわない。これらの傾向に「難波潟潮干」と同一線上の選択意識が働いてはいないだろうか。

後者のことばとしては、「海原」と「白波」とをとりあげる。まず「海原」は、天平五年の憶良の遣唐使を送る「好去好来歌」(八九四)に「海原の辺にも沖にも」とうたわれ、天平八年の遣新羅使人歌にも「海原に浮き寝せむ夜は」(三五九二)をはじめ計六首に用いられ、防人自身の歌の中にも「海原渡る父母を置きて」(四三二八)とあって、舟出の別れの状況下で多用されている。この「海原」を家持は越中守時代にはうたうことはなかったが、難波に於て、

……海原を遠く渡りて年経とも児らが結べる紐解くなゆめ　(四三二四)

をはじめ計六度、すべて防人歌群中に於て、集中して用いている。

集中という点に於て「海原」と「白波」とはまったく対照的である。すなわち「海原」を家持の難波の語とするならば、「白波」は越中の語といえるからである。越中に於て家持は、渋谿の崎の荒磯も、奈呉の海も、布勢の水海も、英遠の浦もすべて「白波」の景によってうたっており、四所の白波は九度くり返されている。注(4)ところがそれが難波の海辺に於ては、わずかに一度「海原見れば白波の八重折るが上に」(四三六〇)とあるきりで、越中に於けるような「白波」への集中は見られない。むしろ、

……家づとに貝そ拾へる浜波はいやしくしくに高く寄すれど　(四四一一)

などの「浜波」は、「白波」でも可能であるところを用いてはいない。

このように海辺の景を越中に於ては「白波」により、難波に於ては「海原」によってとらえるところに、国守として越にあり、兵部

少輔として難波にある官人としての家持の立場を示すものがあり、終生、「草枕」も「海人娘子」も口にしないのは、他の宮廷歌人たちとは立場の異なる家持の、都人としての強い怜悧があったゆえかと思われる。

その強い選択意識を持って、素材やことばの選択と同様に、風土の選択に於て、難波潟を避け堀江を徹底してうたうのも、決して偶然の所産ではあり得ない。

（五）

難波の家持が独詠歌の中でうたう風土として、堀江の他に、唯一度ではあるが龍田山がある。この龍田山の詠出にも、家持独自の風土意識が認められる。一般に龍田山といえば、

海の底沖つ白波龍田山いつか越えなむ妹があたり見む
……（八三）

君により言の繁きを龍田越え三津の浜辺にみそぎしに行く
……（六二六）

人もねのうらぶれ居るに龍田山み馬近づかば忘らしなむか
……（八七七）

朝霞止まずたなびく龍田山舟出しなむ日我恋ひむかも
……（一一八一）

大伴の三津の泊に舟泊てて龍田の山をいつか越え行かむ
……（三七二二）

の五首のように、大和と河内の隔てとして意識され、その場合特に季節感と結びついてうたわれることはない。一方、

雁がねの来鳴きしなへに韓衣龍田の山はもみちそめけり
……（二一九四）

妹が紐解くと結びて龍田山今こそもみちそめてありけれ
……（二二一一）

夕されば雁の越え行く龍田山しぐれに競ひ色づきにけり
……（二二一四）

秋されば雁飛び越ゆる龍田山立ちても居ても君をしぞ思ふ
……（二二九四）

の四首のように、それが季節感と結びついた時は、逆に「龍田越え」という自他の体験とは結びつかない。しかもその季節は「雁」の季節、「しぐれに競ひ」もみちする季節であって、秋が中心となっている。龍田山の描写がこのように二分される中で、龍田を徹底してうたう高橋虫麻呂のみが、龍田越えと春秋の景とを結びつけて、

白雲の　龍田の山の　露霜に　色づく時に　うち越えて　旅行く君は……（九七一）

白雲の　龍田の山を　夕暮に　うち越え行けば　瀧の上の　桜の花は　咲きたるは　散り過ぎにけり……（一七四九）

と天平四年頃の龍田越えと春の桜・秋のもみちの景とを重ねてうたう。虫麻呂には一七四九を含む一連の六首の龍田の桜を詠んだ歌があり、そこに於てはじめて龍田の桜がうたわれているばかりでなく、詠出されている桜の状態もまた他と異なっている。一般には桜花は咲く状態がうたわれるのが常であり、散る状態がうたわれるのは橘や棟や黄葉が通例であるが、虫麻呂は龍田の山の「桜の花は……散り過ぎにけり」と桜花の散る様をうたっているのである。

一方、家持も桜花を好んでうたう歌人であって、天平十九年春三月、越中掾大伴池主と贈答した病中吟に於て、

あしひきの山桜花一目だに君とし見てば我恋ひめやも
……（三九七〇）

とうたい、また、天平二十一年春三月、越前掾大伴池主に報えた歌に於ても、

我が背子が古き垣内の桜花いまだ含めり一目見に来ね
……（四〇七七）

と桜花をうたう。さらに天平勝宝二年春三月、自らの館に於ける宴に於ても「峰の上の桜」をうたって、越中の春の桜をうたうことがしきりである。この桜花は家持が越中赴任後、最初にうたった花であり、梅や橘やなでしこと異なり、越中赴任までの平城や恭仁の生活の中ではうたわなかった花である。それを越中の春にくり返しうたうところに、池主との贈答や宴の性格から推して、家持の都を思うよすがの花ととらえることができる。[注(5)]

難波に於ても、家持が具体的にうたう花は桜を措いて他にはない。それゆえ「陳私拙懐歌」で「桜花今盛りなり」（四三六一）とうたい、二月十七日の独詠歌三首中の第一首④に於て龍田山の桜を「桜花散りか過ぎなむ」とくり返しうたう背景に、越中での桜花に託した思いを重ねて見るべきであろう。ただ、越中では、いずれも咲き揃う桜花を詠んでいたが、難波の④では、龍田の桜の散り過ぎることを惜しんでいる。この難波という地に於ける少々の改変の中に、天平四年に虫麻呂がうたった「龍田の桜の散り」の影響が考えられはしないだろうか。

（六）

龍田山と同じ日にうたわれた⑤の堀江の周辺にも同様の傾向が認められる。一般に、越中に於て福麻呂の伝誦した難波堀江の歌（⑨～⑫）をはじめ、

さ夜ふけて堀江漕ぐなる松浦舟梶の音高し水脈速みかも
……（一一四三）

松浦舟騒く堀江の水脈速み梶取る間なく思ほゆるかも
……（三一七三）

葦刈に堀江漕ぐなる梶の音は大宮人の皆聞くまでに
……（四四五九）

の歌に見られるように、堀江といえば堀江を漕ぐ舟がうたわれることが多い。

家持の場合も、六首の堀江の歌の中、①～③・⑦・⑧の五首は堀江を漕ぐ舟が題材となっている。ただ独詠歌第二首目の⑤の堀江のみは、それらとは異なり、同時の独詠歌④の龍田の桜に類似した傾向を示す。すなわち⑤の堀江ではうち寄せる「こつみ」がうたわれているのである。題材の相違は当然表現の相違にも及んで、堀江の舟をうたう場合には、福麻呂の紹介する⑪の「堀江より水脈引きしつつ」や、家持自身の⑧の「堀江より水脈引きしつつ」及び②の「堀江より水脈泝る」が示すように、「堀江より」という表現は、すべて「水脈」と結びつきうたわれるものであった。ところが、こつみをうたう⑤の独詠歌に於ては、「堀江より」が「朝潮満ちに寄るこつみ」と独自の結びつきを示している。難波潟潮干の景を避けた選択意識がここにも表われており、しかも家持が越中でくり返し用いた潮満ちの描写、たとえば「満ち来る潮の」の類の表現をせず、「朝潮満ちに」とうたうところに表現の工夫がうかがえる。

その上、潮満ちの語の用例は万葉集中ごくわずかで、天平二年大

伴卿の像従某がうたった、

荒津の海　潮干潮満ち　時はあれど……　（三八九一）

と、高橋虫麻呂の常陸国での詠、

……夕潮の　満ちのとどみに　み舟子を　率ひ立てて……

……（一七八〇）

とに、それを見るに過ぎない。その数少ない表現の中で、家持の「朝潮満ちに」と虫麻呂の「夕潮の満ちのとどみに」との間には、④の龍田山の桜と同様に虫麻呂歌の家持歌への影響を思わせるものがある。

独詠歌の第三首目の⑥の歌にも、構想やことばという点で同じ傾向がある。家持が海辺に於て「海人娘子」をうたうことを避けたことについては、既に述べた所であるが、⑥の題詞中に見ることば「江南の美女」は、その対極にある表現ではなかろうか。

家持が第一首目の④で桜の散る美をうたい、第二首目の⑤で堀江に寄せるこつみの背後に玉貝を願った心は、すべて都を思う心の表れであった。その心から異風土の中に海人娘子の存在を思う一般的な憧れではなく、唐風の香りを帯びた都風の「江南の美女」を積極的に想定したものと思われる。この点で、すなわち好風の中に積極的に女人の姿を想定する点で、虫麻呂と家持とに通うものがある。

詳述すれば、都から摂津や上総あるいは常陸の海辺に旅をした虫麻呂もまた、まったく海人娘子をうたわず、ひたすらその土地の伝説の娘子、たとえば菟原処女や真間の手児名を美化してうたい、我が遠妻を手綱の浜の景の中に仮想した。一方、家持は、かねて福麻呂から伝え聞いていた堀江の傍に、都風の女性を積極的に美化してうたう。この構想に類似するものが認められるのである。

結局、家持の難波を代表する龍田山や堀江という風土を含む二月十七日の独詠歌三首（④～⑥）は、防人たちが東の家を思うように、防人歌蒐集の傍ら家持自身の防人関係の政務を離れた都人としての都を思う心が集約されている。二月九日の直接防人をテーマにした独詠三首や①～③の必ず堀江をうたう独詠三首にくらべて、④～⑥は三首ともに違った素材をうたっているが、かえって三首の総合の中に望郷の思いが強く表れており、また家持独自の難波風土に対する意識がもっとも顕著に表われている歌群といえよう。さらに、その独自の風土の背後に、あるいはそのことばや発想の拠り所として、高橋虫麻呂の歌の存在が推測される歌群でもある。

（七）

一連の三首すべてに虫麻呂歌の影響を思わせるものがあるという点で、家持越中守時代、天平勝宝二年三月三日作の三首があげられる。

⑭　今日の為と思ひて標めしあしひきの峰の上の桜かく咲きにけり……（四一五一）

⑮　奥山の八つ峰の椿つばらかに今日は暮らさねますらをの伴……（四一五二）

⑯　漢人も筏浮かべて遊ぶとふ今日そ我が背子花縵せな……（四一五三）

まず⑭では既述の如く「峰の上の桜」という表現が、虫麻呂の「峰の上の桜の花は」（一七五一）以外に他に類例の見られないものである。次いで⑮では「つばらかに」が、虫麻呂筑波歌の「国のまほらをつばらかに示したまへば」（一七五三）にのみ使用されていること

ばである。さらに⑯では「花縵せな」の願望表現に見る「せな」の形が、やはり虫麻呂龍田歌の「名に負へる社に風祭せな」（一七五一）の「風祭せな」にのみ見られる表現である。というように家持の⑭～⑯の三首すべてが、家持と虫麻呂以外には用いない表現を有している点に、虫麻呂歌の家持歌への影響を指摘できよう。

この三首一群の、いわば直線的な虫麻呂のことばの受容にくらべると、先の難波に於ける独詠歌三首（④～⑥）が、いかに虫麻呂のことばや発想を基礎として難波堀江の風土を巧みに取り入れつつ家持風のさまざまな改変を試みているかが認められよう。それは難波の個々の状況ばかりでなく、難波の国を大観したことばという側面からも確認できることである。

難波滞在時、家持は難波の地に讃意を表して、「おし照る難波の国に」（四三六〇）、「難波の海おし照る宮に」（四三六一）と「おし照る難波」をくり返し、金村や赤人もまた「おし照る難波」（九二八・九三三）とうたい、防人歌に於ても「おし照るや難波の津より」（四三六五）の表現を見、難波といえば「おし照る」の讃をこめた表現が一般である。ところが、かつて越の国をうたった時、家持は「天離る鄙」をくり返し[注(6)]「しなざかる越」を多用する一方、越の風土を象徴的にとらえて「み雪降る越」（四〇一一・四一一三）と詠出したように、家持にはさらに「葦が散る」を用いて難波を表す場合がある。

……葦が散る　難波の三津に　大舟に　ま梶しじ貫き……
……（四三三三一）
海原の豊けき見つつ葦が散る難波に年は経ぬべく思ほゆ
……（四三六二）
……いや高に　山を越え過ぎ　葦が散る　難波に来居て……
……（四三九八）

の三例がそれであるが、単なる観念的な、国讃め宮讃め的な「おし照る」とは異なり、「葦が散る」は「み雪降る越」的な意味で、天平勝宝七歳二月の難波の景にふさわしいものである。[注(7)]すなわち、二度に亙って用いられる「葦が散る難波」は、いずれも難波の風土をきわめて象徴的にとらえており、「み雪降る越」とともに、異風土の情景を伝えるとともに、異風土の中に暮らす心を伝えることばといえよう。

この難波の地を確かにとらえた「葦が散る」という家持独自のことばの背景にも、やはり虫麻呂のことばの影響が想像される。それは虫麻呂の用いる「尾花散る志筑の田居」（一七五七）の表現であって、常陸国に赴任していた虫麻呂が、筑波山頂から東方はるか彼方の国庁付近を望見してうたったものである。この「尾花散る」も観念の所産であって、当時の筑波付近を大観した時の象徴的風土であり、そこには晩秋の景の中で旅愁を抱く虫麻呂の心が投影されている。とすれば、「葦が散る」と「尾花散る」とは、春二月の難波に於て桜花の散りをうたうのでもなく、晩秋の筑波付近の黄葉の散りをうたうのでもなく、いずれも表面的な美の飾りを捨てて、葦や尾花の揺れをその時の心にもっとも即したものとしてうたう点に、深く通じるものがある。ここには単に「尾花散る」と「葦が散る」という語句の形の類似にとどまらない、先の夕潮満ちより朝潮満ちへの改変に似通う工夫がある。

以上を総合すれば、家持のうたう難波の風土の背景には、たとえば大越寛文氏の[注(8)]まとめられた家持の類歌類句にとどまらない、もっ

と微妙な形をとって虫麻呂歌の影響が表れているのである。

（八）

越中より帰国後約三年を経て兵部少輔に任命され、新たな異風土である難波に滞在した家持は、防人たちのうたう東の歌と接する機会を持つ一方、自らの望郷の思いをさまざまにうたった。古来、難波の讃歌には宮廷歌人たちを中心に「おし照る難波」の賑いがうたわれ、また行幸従駕の都人たちを中心に難波潟や住吉の岸の美景もしばしばうたわれている。しかし、難波に於ける家持は、それらの讃歌や叙景的な歌の風土と離れて、ただ「堀江」に視点を据えて難波をうたった。防人遥送の任務に携わる家持の、日頃親しい難波の風土は舟の出入で賑う堀江付近であり、しかもかねてから福麻呂を通して堀江には興味を抱いていた。その家持が、越中に於て身近な射水川や奈呉や渋谿をくり返しうたったように、ひたすら「堀江」をうたい、都をしのんだ。

それゆえ、家持の難波は堀江に尽きるといっても過言ではないが、中でも天平勝宝七歳二月十七日の堀江を中心にした独詠歌三首（④～⑥）には、家持の風土に対する選択意識がもっとも強く表出されており、難波に於ける家持の表現工夫の背景にある虫麻呂の影響がもっとも顕著に表れている。歌の優劣はさて置き、風土という面では、越中に劣らず難波もまた、家持歌にとって意義ある土地である。

本稿の骨子は昭和五十八年五月二十九日、上代文学会全国大会（於高岡市）に於て口頭発表したものである。

注

（1）拙稿「大伴家持の風土考・序説」『武庫川国文』第23号
（2）難波潟には他に、一四五三、三一七一、四三五五歌の詠がある。
（3）拙稿「久慈川は幸くあり待て」『上代文学』第45号
（4）渋谿の白波三九八五・三九八六・三九九一、奈呉の白波三九九〇・四〇〇六・四二一三、布勢水海の白波三九九二・四一八七、英遠の白波四〇九三。
（5）針原孝之氏「表現の特色」『大伴家持研究序説』（桜楓社）には、景物についての詳しい分類がある。
（6）尾崎暢殃氏「しなざかる越」『大伴家持論改』（笠間書院）
（7）風巻景次郎氏「葦が散る難波」「万葉」第13号
（8）大越寛文氏『大伴家持の類歌類句』（私家版）

武庫川女子大学教授

清原　和義著　**万葉の歌　1**
人と風土―　明日香・橿原

明日香・橿原で詠まれた万葉集の、人と風土の視点から考察した書。一、いざ飛鳥へ　二、飛鳥古宮―飛鳥の建造物　三、飛鳥古宮―飛鳥の山野　四、飛鳥をめぐって　五、大和三山　六、藤原京　七、藤原京から
口絵と挿絵の写真豊富、巻末に参考文献・万葉地名案内・引用歌索引を付す。（B6版　二三八頁　六〇年一一月刊　保育社　一四〇〇円）